

「秋はいつでも」

秋はいつでも、知らぬ間にそこにいる。

赤松林太郎の新しいアルバムが届き、彼がひと時の想いを託した音の連なりを前にして、私の心はひとりで「秋の歌」を口ずさんだ。上田敏の訳は天才による無二の戯れ。対して、私が愛するのは断然、堀口大學である。「月下の一群」のページを初めて繰った日のことは、忘れがたく心奥にある。

芸術体験とは不思議なものだ。互いの名も知らぬ旅人が、しばしば時を超え、思いもよらぬ果ての街で邂逅する。あのときすすり泣いたヴィオロンが、胸に迫った時の鐘が、風に舞う一葉が、今、赤松のアルバムのなかで確かに鳴っていた。自分の奥底で響き合う、音と言葉の共鳴に、ただ息をひそめて行く末をじっと見守った。

— ゆえしれぬかなしみぞ げにこよなくも堪えがたし —

ふたたびヴェルレーヌは詠い、堀口がそれを鮮やかに口移す。生きてゆくうち、人は<ゆえしれぬかなしみ>に幾度となくすれちがう。かなしみを抱いて生きつづけるとさえ、言いかえてもよい。けれど、せめてこのアルバムから音が溶け出してゆくそのあいだだけは、すべてを忘れて顔を上げよう。音楽がそう語る。

振り向けば中天に月が懸かり、秋の私を照らしている。かなしくも身にしみる月の光は、詩人のうたに似てどこか温かくもあり、ただそこにあって、静かなアルペジオを奏でている。秋涼に身を浸しながら私は、その温かな光こそが愛だと知った。

(2020年9月 加藤哲礼)